

## 第3部 ねぶたの未来を考える

パネルディスカッション「とことんかだれ！ねぶた馬鹿大集合」

パネリスト	弘前ねぶた参加団体協議会	会長	三上富秀栄 氏
	桔梗野ねぶた友の会	会長	松山 憲一 氏
	必殺ねぶた人	制作責任者	中川 俊一 氏
	弘前観光ボランティアガイドの会	会長	中谷 敏右 氏
	弘前ねぶた保存会	会長	清藤 哲夫 氏
コーディネーター	弘前ねぶた参加団体協議会	事務局長	波多野厚緑 氏



波多野      それでは、自己紹介も兼ねて、1人3分ほど、ねぶたの好きな所、ねぶたの良い所、メリットですね、この辺をお話をいただきたいと思います。

中谷          私は紺屋町で生まれましたが、紺屋町は昔からねぶたが盛んでした。ねぶたの囃子聞けばもうご飯は喉を通らない、それくらいやっぱり好きです。私は弘前観光ボランティアガイドをやっております。当然ねぶた期間中の晩も依頼があると案内しているんですけど、東京からお出でのお客さんですね、青森・五所川原、一度見たらもういいです。弘前は毎年必ず来ますというお客さんを案内してくれて頼まれました。で、弘前のねぶたはどこいいんですか？って尋ねたら、赤ちゃんからお年寄りまでみんな参加して、心をひとつにして、ヤーヤドーってやってるわけですね。祭りの原点がそこにあります。だから、好きなんですと言うお客さんがいました。

三上          ねぶたに対してはこの歳になってもまだまだ好きで若い人たちの中さ入ってやってるんですけども、私も死ぬまでねぶたからは離れられないと思ってます。そして、今現在、うちの方のねぶたの趣旨としては青少年健全育成、それから町民の親睦、これを掲げてやってま

す。我々町会の親睦とか青少年健全育成を考えれば、子供さんの名前覚えてれば、いろんな繋がりが出てきます。ねぶたの良いとこってのは、若い人から年いった方の話を聞くんで、子供たち素直です。私もねぶたにはまって、昔は非常に苦労したこともあります。今も若い人たちがみんな一所懸命先輩たちを見て、後継ぎとして動いています。今年も築城400年ということで盛り上がると思います。

松山 私も津軽人として生まれて、たげだばねぶたに関わらないで1年を無事に過ごしたいなどと毎年思っていますが、あちらこちらから笛の音が聞こえ、太鼓の音が聞こえますと、どうしても気持ちがじゃわめいしてしまうんです。我々の代になって今年出陣できれば29回目、足掛け30年の団体です。今ちょうど3歳の孫がいるんですが、その様子を見ますとやっぱりこれは津軽の血だなと、太鼓の音が聞こえれば冬でも春でも夏でも、とにかくまっすぐそこに向かっていきます。そういう思いを何とか地域の子供たちにも残していきたいという気持ちで30年前に我々の手で今の会を立ち上げました。ねぶたがあればまとまりやすいし、そういう意味では目に見えない、町会の各地域の核になってるのではないかなと自負しております。

中川 我々の団体は38年前に一番最初の代が制作を始めまして、僕の代で3代目。で、一番上の初代は60歳を超しまして、一番下が赤ん坊みたいな感じで、上から下まで広く長く続けたことで集まることができて大家族のような感じで制作をして、運行させていただいております。我々の団体は弘前では珍しいんですが、人形ねぶたを作っています。扇ねぶたを1台、人形ねぶたを2台作っているわけで、我々が考えるねぶたの良い所という、やはり皆で作るところ、皆で苦しんで、皆で協力して、100人位の超大家族のような感じで、それぞれが遠慮しないで怒りあったり、喧嘩したり、そんな人間関係をうまくこれからも繋げていければいいなという風に思っています。

波多野 先程、北本の囃子を聞いていて、ちょっと「ヤーヤドー」が短くてちょっと違和感を覚えたんですけども、パネリストの中谷先生、この辺ちょっと知っているようで知らないねぶたのうんちくということで、囃子の「ヤーヤドー」と「ラッセラーラッセラー」と「ヤッテマレヤッテマレ」の話をお話していただければと思います。

中谷 弘前は「ヤーヤドー」と、それは、大條さんの本でしたかな、弘前は剣道の道場が多くて、それが母体となってねぶた喧嘩というものがあつたりなんかする。剣道で打ち込むときにはヤーと打ち込むと、それを受けるときにはトーと受けると、それが「ヤーヤドー」になったんだというお話してました。それから青森の「ラッセラーラッセラーラッセラーラッセラー イッペラセイッペラセガガスコガン」っていうのが囃子なんです。ガガスコというのは鐘ですな、叩く。酒入れてもらうのにちょうど都合がいい。「イッペラセイッペラセ」っていうのは「酒出せ酒出せ」という、「一杯出せ一杯出せ」というそういう囃子があると聞いたと。五所川原の「ヤッテマレヤッテマレ」というのはどういうことなのか。皆さんご存知のとおり、太宰のうちだとか、大地主が北は多いんです。田植えをして、小作人が一所懸命やってるんですけど、地主は小作人を搾取します。小作人は食うものも困っている。で、うっぶん払って暴動が起きますと警察は地主側につくと当時は。そのうっぶんが溜まって、その捌け口ってというのは、認められたのはねぶたの時だと。だから地主を「ヤッテマレヤッテマレ」と言って発散していった。それが五所川原のヤッテマレという掛け声だということわかりましたね。そういう違いがあると。ただねぶたそのものの本家って言えばおかしいんですけど、全部弘前だということですね。そんなことも観光でお出でのお客さんにお話しております。

波多野 青森も揃いの衣装になってるからまあまあ様になってますけど、最近衣装問題も結構弘前も時々新聞紙上を賑わせていたりします。中川さんとはグループのねぶたですんで、どちらかといえば衣装は全員揃えにくいパターンですよ。その辺はどういう風にクリアしてるっていうか、実は重要無形民俗文化財の中には運行っていうのを含んで無形文化財になってるわけですから、いま現状をお話いただければと思います。

中川 うちの団体は一応半纏があるんですけども若い子達が基本自由、ただ5人以上同じ服を着るなど。そして運行中はしっかりと仕事をしてくれと、何かを引くなり、太鼓を叩くなり、

何かをしてもらって、全体として統一感とまではいかないですけど、多少自由に若い子たちとの信頼関係を作りながら、うちはやらせてもらってます。

波多野 三上会長のところは特に統制が取れていて厳しいですけど、別な衣装で出てくるのは排除ですか。

三上 皆さん、茂森新町は厳しい厳しいとよく声聞こえるんですけども、全然厳しくありません。半纏着ないとねぶたに参加できませんよということも絶対しゃべってませんので。それでもおかしいもんで、みんな着れば自分も着たくなってくるんですよ。それがうちの方のねぶたの伝統って言いますか、今の若い人たちもそういうのを守ってずっとやっていますんで、まあ安心して若い人たちに任せてやっていますけども。よくうちの方しゃべられるんですけど敷居が高いとか、ほんとに自由ですよ。

波多野 松山さんところはどうぞ。

松山 あくまでも決まった形、それ以外は駄目ですよというようなことを徹底させるつもりであったんですが、普段学校を休んだり、ちょっとこゝろ悪たれる人たちがねぶたという1つの目標を持って仕事を与えますと、非常に一所懸命頑張ってくれるわけです。そういうのも見えますので、あながち恰好がどうだから排除とか、そういうような形は私自身の気持ちの中では、一概に服装が駄目だから来れば駄目だよというような切り方はしたくないなど。まあ、当然指導はしていかなざるを得ないのかなとは思っております。

清藤 私どもは素人ですけども、昔の絵っていうのは空間があったんですね。それから必ず顔には面がありましたね。ですから上手さというよりも絵としてのそういったことが的確かどうか、とりあえず見てくれというようなお話をしております。運行は、前ねぶたについてはこれは自由ですから、ときどきの世相と言いますかこういったものを大いに出していただいて、高張り提灯はなきやいけない、できれば先頭に運行責任者がいなきやいけないということと、その昔はその町に消防団がありますから消防団が前後ちゃんと守りますよということをつつ現わしてくださいよという、これも一応は見させていたしております。それから笛ですね。いっぱい笛を持ってる方がいてやっていると、1つの笛でちゃんときちんとしてやるところとあるんですね。先程ちょっと斜里と尾島の話が出ておりましたけども、あまりにもかけ離れているようなものがあるんですね。で、調べてみたら、いま弘前ねぶたと称してやっているのが全国で15、6箇所くらいあるんですね。あまりにも酷いようなルールで弘前ねぶたと称したものをやられるのは、いかななものかという風に思っています。ただ、それぞれの町の文化のあり方、環境があるわけでありますので、そのことについては私どもが口を挟むわけにはいきませんので、ぜひそれはそれで地元の方で、いろんな方で発展していけば良いだろうと思っております。弘前ねぶた保存会としては、曲がった方向に行かないように、しっかりと見ていく必要があるだろうという風に思っています。

波多野 どうしても今後止めた方が弘前ねぶたにとって良いよっていう部分をお聞きしたいと思います。

中谷 大きな太鼓に女性がはばかって乗って叩いていると、あれはとても見苦しい。で、考えてみますと今日の松木先生のお話にもありましたように、払いと祈りと願い、そんなものがみんな凝固された形でねぶたという祭りができてるわけですよ。しかも、弘前はですね、風格のある町というものを標ぼうしております。それから、ねぶた絵師の方にお問い合わせなんですけど、どうも見送り絵は鏡絵に比してうまくないというねぶたが何台か目にしたんです。絵師の方は日本画ももう一遍勉強してみてください。女性のこの美しさというものをもう一度女性の方々、若い方々考えてみてください。それが弘前の風格のある行事なんです。これから私たちは変えていいものと変えてはならないものは何かってことで、考えていくべきだろうと思えます。

三上 私も太鼓の上に上るというのは非常に、神聖なものの上にまたがるのはまずいなど思っていて、うちの方も絶対上げてません。囃子の方も音の百選にも選ばれてるわけです。ですから、笛、太鼓、囃子の方もやっぱりそれなりの太鼓と囃子が合体して良い音色を出して、ねぶた運行するということを考えてみれば、音をわざわざ消しているような感じとなります。最近、非常にねぶたも大型化して、合同運行であってでも本当のねぶたの姿が見えないと。

開きが雲漢の下まで下がってきて、ねふた本体もほとんど下がって、横になって歩いてると。最近台数も多くなってきてますんで、弘前の場合は地域のねふたですので非常に難しい面もありますけども、協議会の方でも考えて、みなさんと協議しながら考えていきたいなどは思っております。

松山 私も囃子の方の話になるんですが、大体小っちゃい子供たち、一番初めに囃子の練習に来て何をやりたかっていうと、太鼓叩きたいって来ます。ただ太鼓叩くためには笛をきちっと吹けなければ太鼓もリズム狂います。町会でねふたやってますと色々な子供たち来ます。で、最初から楽しませますとねふたってこういうものかというように思いで、結局ねふたを甘く見てしまうわけです。我々は来た人間は大事にしたいなとは思いますが、その本当の苦しさ、そこをちゃんと理解して、それでも尚且つ付けてくれる子供たちが将来を担っていくほんとのねふた馬鹿になっていくのかなという思いは常に持ってますので、できれば、これからねふたに関わっていく皆さん方がそういう思いを持ちながら、ねふたに向かって行ければなど。人にもものを見せる以上、そこだけは一番いい形で見せられるような状況は私たちも努力していかなければならないのかなと思います。

中川 拡声器、ヤーヤドーかける時のあれが気になるなって思うんですよね。ヤーヤドーかける側が拡声器でかけて、返す方は地声って、返す方も返しにくくて声が小さくなったりして。また、全然違うことなんですけども、今の弘前ねふたまつりでこれだけは止めてほしいこと。9時半を過ぎた時にダッシュで10時までに運行のコースを抜けてくれ、あれが非常に、うちの団体最後の方に来ることが多いのでだんじりかっていうくらいのスピードで運行させられる。何か弘前全体で台数がここまで増えたのはねふたまつりとしては良いことだと思いますので、それを生かせる運行の新しい形態というのを主催者、参加団体協議会、各参加団体、みんなで考えていければいいなという風に思っています。

波多野 ねふたの将来についても語らないといけないわけでございます。弘前大学の調査によりますと町内で出してる参加団体の皆さんはちゃんと目的持ってるんですね。今までのお話の中で子供の教育の一環だというのが非常に明確にわかってるんですね。それに対して、グループのねふた、それから企業のねふたは観光でもない、伝統でもない、教育でもない、目的がいまいちはっきりしてないというのがアンケート結果に出ております。それから、観光というものに対しては、観光にとってもねふたは大事だという団体が非常に増えてきておるようです。この辺も含めて、今後、弘前ねふたがこうあるべきで、こういうところを守っていこうという部分も含めて、お話をちょうだいしたいと思います。

中谷 ねふたが大型化されすぎて、一番良い姿を見せていないんじゃないかと。黒石のねふたが人気出てるんですよ。つまり、田舎館、尾上、あれはみんな黒石の方に行きます。弘前みたいに大きくないんです。田んぼがあって、その向こう側に岩木山があって、岩木山がずっとみえるあたり、そこをねふたが通っていきますと絵になるんですね。ですから、大きなものを自慢するよりは、一番良く見える姿の大きさというんですか、それはねふた出す各町内、あるいは参加団体、もう一度考えて、きちんとした一番良いねふたの姿を見せられるということをご心得ておかないといけない。その辺はあと何か月かでねふた始まりますので、研究してみたいかがでしょうか。

三上 本当のねふたってというのは、雲漢の四角い所、あれから来てると思うんですよ。その本当のねふたの上に開き、扇、付いてきたものなんですね。ですから、それを隠すっていうのは本当のねふたではないんでないかなと思うわけです。鏡のねふた来て、後ろを見て、最後の見送り見て、哀愁を感じるというような気持ち、ねふたはそうでなければならぬでないかな。これは変える必要もないし、何十年、何百年続いてもいいんじゃないかなと私は思います。

松山 子供たちの育成ということに関して、交通事情、また地域のボランティアの力を借りるのが難しくなって、取りやめになってるというような所がかなりあります。ねふたに興味を示す子供たちが非常に少なくなってきました。一番困るのは、親がねふたに出させないようにするというような状況も生まれております。我々やってる側も理解をしてもらえようような努力もしなければいけないし、少なくとも祭り期間中に弘前に足を踏み入れた時にねふた祭り

が醸し出す雰囲気みたいなのをもっともっとあってもいいのかなと。見てる人たちが何が面白かったのかみたいな意見をどんどんやってる我々に伝えてもらえたらなど。

中川

観光か、地域かとなれば、地域が先なんではないかなと。まず地域の人の繋がりにという部分をしっかりと築き、良いねぶたをやって、それを見てもらうということが必要なのではないかなと思っています。弘大の調査の方に関わらせてもらって、結果を見ていて思ったのが、「どちらとも言えない」という回答が非常に多いんですよ。やはりそこはそれぞれいろんな立場から議論をして、これからの方向性みたいなものを少し決めて固めていかなければならないのかなという風に思っています。最後に、地域と歩み寄りを我々が率先して行って、津軽地域全体でねぶた祭りをより良いものにしていって、それを観光として外の皆様に見せられるように頑張っていけたらいいなと考えています。